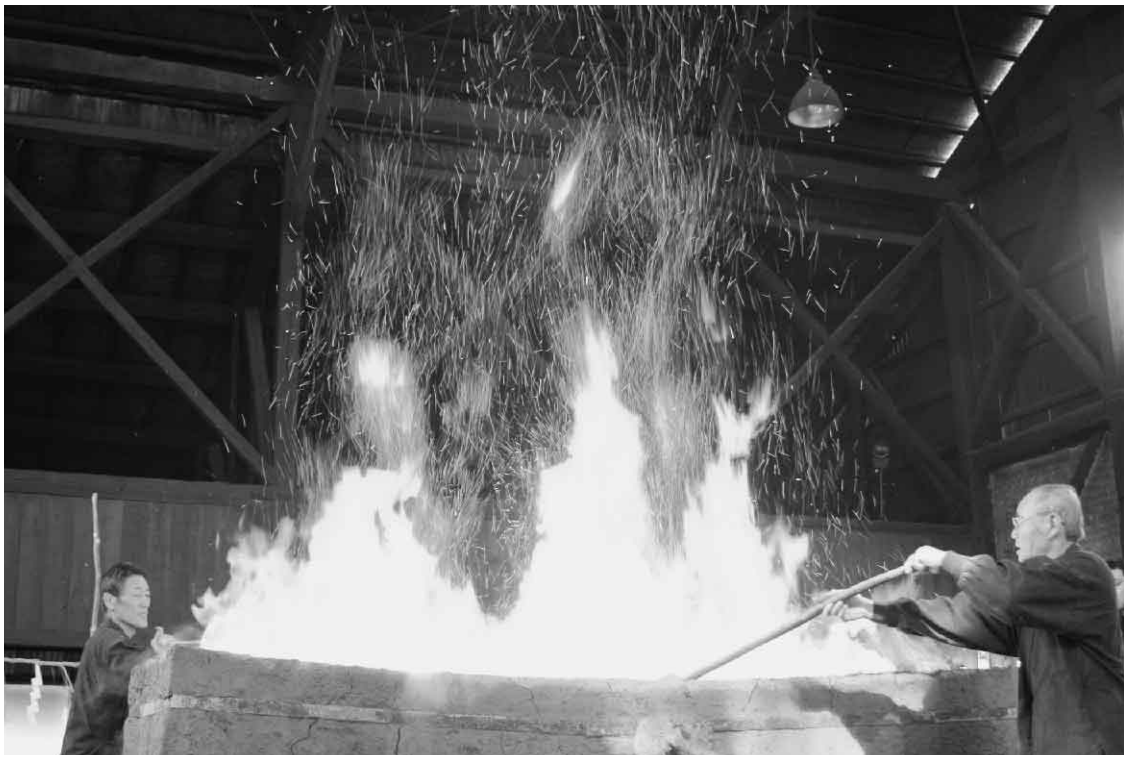
日刀保たたら

鉄師の魂　受け継ぐたたら操業



全国で唯一、日本刀の材料・玉鋼を生産している「日刀保たたら」で一月十八日から二十一日にかけて今年度一代目のたたら操業が行われました。

「日刀保たたら」は、戦後しばらく途絶えていた伝統的な製鉄技術「たたら」を保存、継承するため昭和五十二年、日本美術刀剣保存協会により鳥上木炭銑工場内の旧靖国たたらが復元されました。

たたら操業には、国選定保存技術保持者の木原明村下をはじめ多くのスタッフが、三昼夜、不眠不休で取り組みました。

▲ 玉ぐしをささげる岩田町長

良質の玉鋼の出来を願い　火入れ式

初日の十八日には、日本美術刀剣保存協会、日本刀匠会、日立金属安来工場、靖国神社などの関係者、地元からは岩田町長、大谷商工会長など約三十人が出席し火入れ式が行われました。

玉ぐしをささげ、炉を清めた後、村下の木原さん、渡部さんにより炉の中に最初の砂鉄を入れる「初種（はつだね）」の儀式が行われ、今年の操業の始まりを告げました。

心を一つにして取り組む　たたら操業

たたら操業では、村下の木原さん、渡部さん、刀匠、村下養成員が心を一つにして、三昼夜にわたり三十分毎に砂鉄と木炭を炉に入れ、途中、不純物を取り出す「のろ出し」など過酷な作業が行われました。

二十一日の早朝には、炉を取り壊し、中から玉鋼の原料になる約三・五トンの「けら」と呼ばれる鉄塊が取り出されました。

▲ たたら炉を壊しケラ出し

今回の操業では、砂鉄十トン、木炭十二トンから約二・五トンの玉鋼が生産され、引き続き二代目に入りました。

この玉鋼は全国二百十人の刀匠に供給され、様々な美術刀剣が造られる予定です。

特にこの度は、二十年に一度開かれる伊勢神宮の式年遷宮に納められる予定です。

また今回のたたら操業には、全国から多くの取材陣が訪れ、鉄師の魂を今に伝える伝統文化の象徴として広く報道されました。